
国民たちへの脅迫状

硯間 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国民たちへの脅迫状

【NZコード】

N4437D

【作者名】

硯間 隼人

【あらすじ】

愛宕署捜査一課に勤める刑事・古谷はある日テレビである脅迫状を目にする。最初は誰もがイタズラだと思っていたが、数日間に脅迫状に関する殺人が発生。ただならぬ気配を感じた古谷が脅迫状を送りつけた犯人探しをはじめだす。いったい犯人は誰なのか！よくわからずに進んでいくミステリー。読んでみてください。

第1話 齧迫状

『彼』は朝の情報番組をじっと見ていた。画面上では朝の顔とも言える人物が軽快にトークを弾ませる。

しかし、『彼』はそんなものには興味がなく、見ていたのは画面左上に見える時計だつた。朝はいつもこれを見て、家を出る時間を決める。それが『彼』の日課だ。

7時42分 『彼』は右手に持っていた黄色いマグカップをテーブルにおいて、席をたつた。

『彼』はアイロンのかかつたブレザーを着ながら、テレビに映っている時計を確認した。

7時50分 いい時間だ、と『彼』はつぶやき、テレビの電源を消した。

『彼』はテレビを消したあと、パソコンの電源を静かに入れた。パソコンの起動音が部屋に広がっていくのを感じた。

数秒後、パソコンが立ち上がつた。ディスプレイには数個のアイコンと草原の画面が広がつていた。

『彼』はマウスをすばやく操作して、画面に出ている何かをクリックした。

「これでよし。」

『彼』はパソコンを急いで消した。

『彼』は通学用のかばんを手にもつて、ゆっくりと家を出て行った。

「あー眠い…」

古谷は愛宕署捜査一課係長代理の席で眠りにつくとしていた。

「おい、起きる」

増田係長代理の拳が古谷の頭を直撃した。

「いたつ！なんだよ…増田。ちょっとぐらい寝たつていいだろ。ほ

ら俺たち同期なんだし…」

「駄目だ。お前としてはいいかもしないが、俺はこの席で昨日の強盗殺人事件の報告書を作らねばならない。わかつたらひりかわとこをじけ。」

「へいへい…」

古谷は頭をかきながら席をたつた。

そのとき、鬼課長と署内で恐れられている西原課長の声が響いた。

「おい、なんだよ。このニユース…」

古谷と増田が休憩室のソファにかけていた西原のそばに駆け寄った。

「見てみろ…これ…」

西原は楊枝をくわえているのを忘れ、口を開けてしゃべった。

古谷と増田はそのニユースを食い入るように見た。

ニユースキャスターがしゃべり始めた。

「繰り返します。この文書は今日、わがテレビ局にメールで送られてきたものの写しです。『覧ください』そこには『』書いてあった。

脅迫状

まずはじめに、この脅迫状はこのテレビ局を脅迫しているわけではない。国民すべてを脅迫している。

宣言しよう。私は一週間後、この日本で一番悪な者を抹殺する。といつても犯罪者を殺すわけではない。殺す人は一週間後に決める。死ぬのが嫌な奴は、今から言つことを一週間行いつづける。

1、神を崇拜しろ。毎朝7時におきて手を三回鳴らして五秒間拝め。

2、人が喜ぶことを行え。

以下のことをちゃんとしている者は命が助かるだろう。だが国全員がこれをすると、誰も殺せなくなる。そこで、ポイント制にする。2、は人が喜ぶことをしろといつているがこれをポイント制にする。つまり人が多く喜ぶ事をするほどポイントが高くなるのだ。そこを理解してこの一週間を生きて欲しい。

注意

私は国民全員を見ている。以下のことを怠つた場合は次の日死ぬと思つておけ。

それでは国民の皆さん。がんばってくれ。管理人よりと書いてあつた。

「ただのイタズラだらう」「うう

増田はくだらん、とつけたし休憩室を後にした。

「イタズラなのかね…」

いつも強気な西原も少し弱気になつた声を出した。

「さてと、仕事仕事…」

西原は脇に週刊誌をはさみ、休憩室を出て行つた。

休憩室は古谷ひとりになつた。古谷はまだその一コースを見ていた。

「何かが、起きそうだな…」

古谷はそつづぶやき、休憩室を後にした。

「おー、こないだの放火の事件の犯人は家に帰つてきたのか！」

先ほどのショックから一瞬で立ち直つた鬼課長の大声が響く。

「まだです」

古谷は自分の席に向かいながらこたえた。

「だったらさつさと張り込み行つてこい！小島が待つてゐるぞ

「はー…」

古谷はいすにかけていたコートを手にもち、捜査一課を後にした。

第2話 放火犯

「で、あいつ帰ってきた?」

古谷は路地に止まっている一台のスカイラインに乗り込んだ。

「いえ、誰も：ふわあ俺もうねむいつすよ。何しろ徹夜ですから」車の中にいた後輩刑事の小島はあくびをしながら古谷に話しかけた。後輩の小島はとてもいい奴だ。めんどくさい仕事は変わってくれるし、古谷のつまらない冗談も笑ってくれる。

「もうちょっとで増田が来るから。それまでがんばれ。ほら、コーヒー

古谷はここに来る途中でコンビニで買ったブラックコーヒーをあくびを連発する後輩刑事に手渡した。

「あっ、ありがとうござります」

小島は手渡したコーヒーのブルトップを開けておいしそうに音をたてて飲み始めた。

「ところで、いつになつたら帰つてくるんでしょうかね」

小島はコーヒーを飲みながら、前方に見える少しきれいな五階建てのマンションをあごでさした。

「さあね。これだけは27歳になつた今でもわからないもんだよ」古谷は手をこすり合わせながら椅子を倒した。

数時間後、古谷の携帯の着信音が車内に響いた。

古谷は、めんどうくさそうに携帯の液晶画面を覗いた。そこには西原課長と表示されていた。

「もしもし、古谷です」

古谷は急いで電話に出た。

「あー俺だ。張り込みの方は順調か?」「順調ですが、進展はありません」

古谷は今の状況を正直に話した。隠してもいざねばれることだ。

「そうか…じゃあ、もう張り込みはいい。その被疑者が住んでいる

マンションの住人に聞き込みして今日は引き上げて来い

「わかりました」

古谷は西原が電話を切るのを確認した後、携帯電話をスーツの右ポケットにしました。

「おい、おきる。小島。聞き込みいくぞ」

小島は深い眠りについていた。その寝顔はとてもリラックスした表情で起¹すのは気が引けたが、仕方なく小島の肩を叩いた。

「えつ……なんですか……」小島はまだ事態が把握できていらしゃい。「だから、聞き込みいくの」古谷は前方のマンションを指差して、軽く怒鳴った。

「あつそうですか……ちょっと待つてください。したくしますんで……」小島は寝ぼけた顔でゆっくりと起き上がり、掛け布団代わりにしていたスーツのジャケットを着て、緩んでいたネクタイをきつちりと締めた。

「じゃあ、いきましょう」小島は車のドアを開けて外に出て行った。「ああ、行²」古谷もそれに続いた。

聞き込みで最初にいつたのは古谷たちが追つている被疑者の隣の部屋に住む『斎藤』という家族だった。

小島がチャイムを鳴らす。中から一十代と思われる女性が出てきた。

「すいません、警察のものですがちょっとお時間ようじでじょうか」

古谷は丁重に話し始めた。

「ええ。別にかまいませんけど……私に何か……」

「はい。実は隣の方のことなんですけど……」

「ああ、菅原さんのことですか？」

女性は何かを思いついたような顔をした。

「はい、そのことなんですけどね。菅原さんこのあたりでの評判はどうでしようか」

斎藤は少し考えた後言った。

「菅原さんは評判いいですよ。静かだし、『ノリの分別守る』

「どうやら菅原はこのあたりでは評判は悪くないらしい。

「その他変わったことはありませんでしたか?」

横から小島が話しに入ってきた。

「そうですね…特に あつあれ菅原さんじゃないですか」

斎藤は猫背でグレーの小汚いジャケットを身にまとつてとおりを歩いている男を指差した。

「本当にですか」小島は男を凝視しながら言った。

「そうですよ、やっぱりそうだ。あれは菅原さんです」斎藤が興奮

したように言った。

「間違いありませんか」古谷は斎藤に確認をとった。

「間違いありません」斎藤は古谷のほうを向かずに言った。

「職質かけよ」古谷は小島の肩を軽く叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437d/>

国民たちへの脅迫状

2010年10月8日23時09分発行